

E・H・カーと人間の理性の可謬的性質（４）：カー著伝記『バクーニン』に関する分析

河村, しのぶ
九州栄養福祉大学

<https://hdl.handle.net/2324/7393080>

出版情報：総合文化学論輯. 23, pp.29-52, 2025-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。



E・H・カーと人間の理性の可謬的性質（４）：

カー著伝記『バクーニン』に関する分析

河村　しのぶ

第一部 序論

はじめに

本稿は、E・H・カー（Edward Hallett Carr, 1892-1982）が著した第四の作品である、伝記『バクーニン』（1937）を研究対象とし、その作品に描かれた人物像を通じて、「人間の理性の可謬的性質」という主題を読み解くことを目的とする。

カーは『危機の二十年』（1939）や『歴史とは何か』（1961）といった理論的著作によって国際政治学・歴史哲学において、広く知られている。また、ソヴィエト・ロシア史の第一人者のひとりとしても、膨大な研究業績を残している。

しかし、1930年代に、彼が一連の伝記作品を執筆していたことには、これまであまり注目されてこなかった。カーが著した四作品の伝記のうち『バクーニン』は、アナキスト思想家ミハイル・バクーニンの生涯を通して、理念と現実との齟齬、理性の硬直化と誤謬の反復、さらには人間的破綻の構造を描き出した一書である。

本書『バクーニン』全編を通じて、ミハイル・バクーニンは、理念の純粹性に殉じようとするがゆえに現実との摩擦を生み、しばしば暴発的な行動や他者との断絶へと至ったことが表されている。したがって以下の議論に明白なように、本論考も第二部を通じて、バクーニンが理念の純粹性に殉じようとするがゆえに現実と摩擦を生んでいく過程を詳細に検討している（本論第二部参照）。

カーの原著全体において、その過程は単なる個人的欠陥や偶発的失敗としてではなく、理念と理性の関係が孕む構造的な問題として描かれている。カーはこの誤謬を断罪も美化もせず、理性の限界と人間の努力の痕跡として冷静に記録した。しかし、その筆致は一見冷静で皮肉さえも交えているにもかかわらず、どこか、バクーニンをいつくしむような全体的印象を放っている。

伝記作品執筆という文学的研究の過程において、カーはロシア的知識人たちの東欧的な生き様や思考様式を研究するうちに、理性的で合理的とみなされている西欧の人間像に対して、少しずつ距離を取り始めた。時には非理性的であり可謬性を含む人間こそ、より真実味のある人間像であるという結論に彼は至ったと考えられる。そのことが、カーの著した伝記作品を通じた拙論における分析により明らかになってきた（河村 2024a、河村 2024b、河村 2025b）。

拙論による一連の「E・H・カーと人間の理性の可謬的性質（１）～（３）」（河村

2024a、河村 2024b、河村 2025b)における研究により、明らかにされているように、1930年代のカーがロシア的文化と邂逅したのちに得た人間の理性には可謬的性質があるという視点は、はたして『バクーニン』伝にも存在するのだろうか。

以上を明らかにすることを目的とする本稿の構成は、次のようになっている。まず、第一部では「はじめに」で本稿の目的と構成を述べ、次に、「問題の所在」を論じる。続く、論文の論証部分である第二部では「Ⅰ. 自由」、「Ⅱ. 平等」、「Ⅲ. 友愛」というバクーニン自身が掲げた三つのスローガンにおいて、バクーニンの理想と実生活である現実との関係を検討する。第三部では伝記作品「Ⅳ. 『バクーニン』の総括」においてこの作品を総括する。そして、「Ⅴ. 伝記作品におけるカーと人間の可謬性」では、本論における『バクーニン』伝の考察に基づいて、『ドストエフスキー』（1931）、『浪漫的亡命者たち』（1933）、『カール・マルクス』（1934）から『バクーニン』までに一貫してカーが人間の理性の可謬的性質というテーマを扱っていたことを明らかにする。

以上、本稿の目的と構成を述べた。

続く章では、問題の所在について論じていく。

問題の所在

本稿の問題関心は、E・H・カーの伝記作品『バクーニン』に描かれた人物像において、理想と現実の関係がどのように「可謬的な構造」として表現されているかを明らかにする点にある。この伝記を通じて繰り返されるバクーニンの行動パターンとして明らかなものは、バクーニンは理念の純粋性に殉じようとしたがゆえに、現実との齟齬を繰り返し、その行動はしばしば失敗に終わった¹。この誤謬は単なる個人的欠陥ではなく、理念と理性が孕む構造的な問題として浮かび上がる。

従来の研究は、バクーニンを思想史的・伝記的文脈で読み解くことが多く、その主眼はアナキズム思想の理解やカーの伝記作家としての側面に置かれてきた（ピルモヴァ 1973、勝田 1979、西村 2012等）。

しかし、そこでは「人間理性の可謬性」という観点からの体系的検討は俎上に載ってはいなかった。

それに対して、本稿は、理性が理念に従属することで現実の複雑性を切り捨て、誤謬を反復する構造そのものに焦点を当てることを目標とする。

カーのテキスト全体を通じて、バクーニンの理想と現実の乖離は、カーが描いてき

¹ 例を挙げれば最も明白かつ明確なそのような事例は、第一章、第二章、第三章、第十三章、第十四章、さらに続く章に現れ、枚挙にいとまがない。

たその他の作品の多くにも散見される、彼が解釈したところのロシア人的特徴としての「思索への埋没」によるところが大きい。この実生活に基づかず、地に足のつかない思索への陶醉は、自身の理念と理性の可謬性を意識しない、自己省察の欠如により引き起こされる。そのために、バクーニンは誤謬を繰り返し続けるとされるのである。

その姿は、読者にとってはもどかしくもあり、カーにとっては、そうであるがゆえに、共感を以て表現すべき人間像としてバクーニンを描いている。

カーは、西欧的リベラリズムの想定する、自律的で、合理的かつ理性的な人間像と対照となる人間像を、伝記作品の最終作品を執筆するこのころまでに、すでに確立していたと考えて支障はあるまい。

なぜなら、西欧型の人間像に対して異なる文化的な背景による心理的要因とそれに基づく行動様式を描くカーには、後の文化心理学的な人間観に通ずる萌芽的視点が、すでに見いだされる（北山 2025）。

すなわち、文化の相違が人間像の相違を露呈するという視点である。かつて彼の父と共に、熱心な自由党党员であったカーが、リベラリズムの系譜に対して批判的距離をとる人間観を抱くようになったのは、まさに東欧の知識人たちを中心とする伝記作品群における研究の果実に他ならないといえるという推論はこれまでの拙稿の分析結果からして、十分に成り立ちうると考えられる（河村 2022a、河村 2022b、河村 2023a、河村 2023b、河村 2024a、河村 2024b、河村 2025b）。

以上を明らかにするために、先述のように、バクーニン自身が掲げたスローガンであり、最重要三大要素である「自由」「平等」「友愛」に分けて、バクーニンの理想と実生活である現実を検討し、そこに生まれる齟齬と人間の理性の可謬的性質を検討していきたい。

以上、本稿の問題の所在を明らかにした。

次章よりは、論証部分として、一章ずつ、バクーニンと彼の掲げた「自由」「平等」「友愛」においてのカーによる解釈を検討していく。

第二部 論証

I. 自由

I. 1 父権への反抗

ミハイル・バクーニンの出発点は、ロシア貴族社会の典型的な家父長的秩序に対する反抗である。生家プリヤムヒノはトヴェル州、オスガ川に面した広大な荘園であり、そこでは生活が「オスガのゆるやかな流れ」を模すように、悠揚と安寧を価値とする

秩序が支配していた（3-4：9-10）²。父アレクサンドルは啓蒙趣味の教養人でありながら、加齢とともに「怯えたりベラルに特有の保守的狂信」を帯び、家内には十八世紀的な家父長権を確立した（7：14）。カーはアレクサンドル・バクーニンを以下のように評している。

人間味や教養や知性があり、彼の家庭や家族には献身的だが想像力に欠け、臆病な自由主義者によくみられるように保守的なファナチズムを多少持っている。こういうアレクサンドル・バクーニンが青年の反逆本能あるいは革命的野心に共感しないのは当然である（7：14）。

以上のようにカーはこのような父と、反逆精神旺盛な息子の中に生まれる衝突を不可避であったかのように描いている。

このような父の下に「理性と秩序」の名で組み立てられた生活は、少年期のミハイルにとってこそ安寧であったが、青年期の彼には束縛の記号として立ち現れる。

決定的転回は、長姉リューボフの婚約問題である。父は家名と安定を根拠に婚姻を推したが、ミハイルは「愛なき結婚は人間の尊厳を損なう不自由」であるとして、姉妹たちの側に立ち、姉に「父に抗して婚約を拒否すべし」と迫った（14-15：22-23）。家の内なる均衡は破れ、十八世紀的道德（家長の裁断）と十九世紀ロマン主義（内なる神火、すなわち自己の最高能力への忠誠）との正面衝突が生じる（14：23）。カーは、バクーニンのロマン主義に依拠した主張を以下のように描いている。

1830年代にはロマンティズムは後進国ロシアにおいてさえ一風潮であった。プリヤムヒノへその息吹をもたらしたのがミハイルであった（14：23）。

浪漫的思想は、このようにミハイルによってプリヤムヒノへもたらされたのであった。

カーはまず、以上のように記したうえで次のように続けている。

人間の義務はもはや固定した法や生命を失った因襲によって規定されなかった。それは自分自身の内部の神聖なひらめき、彼自身の最高の能力への義務であった。人間は青春と哲学と愛の共同の判断によって、最高のものを獲得しえた。愛する

² 本稿において、これ以降、著作名や出版年がなく、括弧内に数字のみを記している個所は、『バクーニン』のページ数であり、括弧内の前半が原著のページ数、後半が邦訳のページ数を意味する。

ことは地上の人間の最高の使命であった。愛なしに身をまかすことは聖霊に対する罪であった。なんとしてもこの罪からリューブフは救われなくてはならなかった（14：23）。

すなわち、19世紀浪漫主義者のミハエルの視座からは、聖霊に対する罪を犯す前にリューブフの愛のない結婚は18世紀の因習がなにであれ、阻止されなければならなかったのである。

この局面でのミハイルは、現実調整よりも理念の純粹性を優越させ、「現実の人間関係を理念の下位に置く」傾向を早くも示した。四か月にわたる応酬の末、1833年12月、婚約は破棄された（15：24）。勝敗の帰趨は若者の側に傾いたが、家族の精神史は不可逆の変位を経験した。父の権威は崩れたわけではない。だが「親の無謬」神話は剥落された。以後、ミハイルは外部世界のあらゆる権威を「審級の対象」として吟味し、しばしば断罪するようになる（16：25）。カーはこの過程を次のように記している。

両親は決して誤りを犯さないという信仰はこども時代の他のおもちゃとともに置き去りにされた。ほかのすべての権威が順番に裁かれ、その無能が見出され、絶滅を宣告される、そういう時がミハイルの人生にやってきた（16：25）。

すなわち、ミハイル・バクーニンにとって両親は今や庇護者ではなくなったという。このように、ミハイルの人生における権威への反抗と破壊の重要性をカーは提示する。カーの筆致は冷やかでありながら、そこに微かな共感が通っている。彼はミハイルの初恋よりも「最初の反逆」をより重要な画期として位置づけ、以後の全生涯に反復される構造、すなわち、理念を絶対視するがゆえに現実を裁断し、他者を代償としてしまう逆説の原型をこの家内闘争に読み取る（12：20）。先述の描写にもあるように、カーは父・アレクサンドルを「人道的で文化的だが想像力に欠ける」人物として描き（7：14）、ミハイルの反抗を単なる若気の暴走ではなく、理性が理念の名において誤りを正当化する可謬性の発現として位置づけている。

四方八方から責められたアレクサンドル・バクーニンは頭を垂れ敗北を認めた。彼は65歳だった。この不屈の長男に対抗する勢力も忍耐力もなかった。それに結局のところ、彼は子供たちのすべてを愛していたので、とことんまで争ってみじめな結末を見たくなかった（15：24）。

カーは、老いて、徹底抗戦の余力もないアレクサンドル・バクーニンの失意を、若

く見境のない、バクーニンの反逆より、深い愛に基づいたそれとして描いており、両者の対比によって、カーはアレクサンドル・バクーニンの負った深い傷を表現している。

このエピソードに現れた、秩序への従順に代えて理念の純粋さを選ぶとき、その純粋さが他者の現実を傷つけ得るというこの逆説は、バクーニンの人生において、のちに政治・組織・友情・金銭の場面で、さまざまに変奏されることになる。

背景としての家庭像も、この読解を裏づける。プリヤムヒノの暮らしは「壮麗ではなく広々として質素」で、教育は語学・楽器・合唱・歴史にまで及ぶ周到なものだった（8-9：15-16）。家族の親密な結束と自然への感受性は、ミハイルの想像力を涵養しつつも、やがてそれが「内なる神火」への忠誠として結晶すると、家父長秩序との衝突を避け難くする。カーは、ここに十八世紀的幸福の「のどかでひろびろとした」河が（3-4：9）が十九世紀的主体の激情に浸食される瞬間を見ている。

この節の帰結は二つである。第一に、ミハイルの「自由」は、権威からの解放であると同時に、他者、すなわち父と姉の生存戦略を自らの理念尺度で裁断した。

第二に、家族内での「勝利」は、以後の社会的・思想的闘争において反復される行動様式（理念の優先／現実の軽視／断絶の容認）を確立する。既述のカーの言葉を借りれば、彼は「偉大な恋人ではなく、偉大な反逆者」として記憶されるべきだが、その反逆の最初のかたちが、父権への反抗に他ならない（12：20）。

以上、ミハイル・バクーニンの父権への反抗を理念と現実という観点から考察した。

以下には、バクーニンに生涯付きまとった金銭的問題と対人関係について検討する。

I. 2 金銭的問題による地位の喪失

プリヤムヒノの外界へ踏み出したミハイルは、「自由」を生活の原理に掲げつつ、その直後から金銭問題で友人・縁者との摩擦を重ねていく。砲兵士官候補期から少尉任官に至るまでの三年間だけでも、彼は「右から左から借金し」、高利貸しに手形を乱発し、計 1,900 ルーブルの負債を積み上げた（11：18）。急場の肩代わりはしばしば父の知人によって密かに行われ、1833 年の帰郷時には父が 600 ルーブルを即時弁済したが、残余は債権者たちに諦めさせようとして、債権者たちは十年後にも返済をしてもらえていない有様だった（13：22）。数字は冷酷なほど正直に、バクーニンの自由の理念が、現実の負債と他者の負担に支えられていたことを示している。

ここに見えるのは単なる怠惰ではなく、理念が現実的責任から遊離する構造である。カーによれば、ミハイルは友情を「精神的共鳴の共同体」とみなし、金銭の具体性を卑小な瑣事として扱う傾向があった。ゆえに支援の受領は躊躇がない一方、返済や約束は曖昧化しやすい。この「理念の純粋化」は、自由の名の下に他者の自由（生活の

余力)を浸食する。しかも彼自身は、当座の困窮を「個人の束縛」と捉え、理念の飛躍によって保持しようとする。理念の自己目的化が、関係の破綻を招く端緒となるのである。ここにバクーニンの「自由」に対する可謬的解釈が明白にされている。

この金銭感覚を、西欧、とりわけ英国的な勤勉・節制・自助の倫理から見れば「常識外れ」と評したくなるだろう。だがカーの描写は単純な道德裁断を避ける。彼は、ポーランド国境の辺地勤務や軍隊生活の孤独が、ミハイルに「知の渇き」を育てると同時に、現実的な自立基盤を空洞化させてゆく二重性を描き出す(17-18:26-27)。学ぶこと・語ること・共鳴することへの希求は、収入と支出の均衡、信用と責任の維持といった現実の倫理に橋を架けないまま膨張し、結果として依存の連鎖を生む。理念は崇高であっても、その維持コストは周囲の人間関係に転嫁される。ここに、第一節で露呈した「自由の可謬性」が、金銭という可視的な指標を通じて、より露骨に姿を現すのである。

プリヤムヒノにおける家族の受け止め方もまた、構造の複雑さを示す。1833年の帰郷で父は急場を救いつつも、以降、息子の負債請求にたびたび苛まれる(13:22)。若者の側の「勝利」は、家の側から見れば長期のリスク移転であり、倫理的には「権威からの自由」の獲得が「他者の負担」という反照面を伴うことを意味する。ミハイルが軍務の規律を「臆病者、弱虫のために作られ、勇氣と野心のある人々のためには作られなかった」と感じて退いたときから彼の生涯を通じて、理念はさらに現実基盤を手放し、負債・周縁ネットワークに生計の基盤を依存するようになった(18:28)。自由は、現実と対話することでのみ持続可能である。この事実を直視しない限り、自由の名は逸脱へと反転する。

ここで少し長い引用となるが、父・アレクサンドルからミハイルへの手紙と、その手紙を受けとったミハイルが姉・ヴァルヴァーラにあてて書いた手紙を対照させたい。現実生きる中での理想の在り方を説く父と、それを受け入れない息子の姿をカーが見事に描写している箇所であるからである。まず、カーはアレクサンドルの手紙を引用している。

真の哲学は幻想的な理論や空虚な言葉の遊戯のうちにはない。それは、家族や社会や国への日々の責務を遂行するうちにある。お前はこれらの責務を無視し、奇怪な幻想やあらゆることを犠牲にさせる「内的生活」なるものについてのおしゃべりに耽っている。だがその間、お前はどうすればお前自身から脱出できるかわかっていない。お前を苦しめているこの失意は傷ついた自尊心や怠惰な生活や不安定な良心の報いだ(29:42-43)。

六十余年を現実に根差しつつ、「面白味や想像力に欠ける」と評されても、確実に

家族を守って生きてきた「堅実な」哲学論を父は息子に送った。

しかし、以上のようなアレクサンドルの雄弁な父親としての地に足の着いた忠告は、「ほとんどの父親の忠告と運命を共にした」とカーは記し（29：43）、ミハイルがヴァルヴァーラへあてた手紙をその直後に引用している。

愛があるところに責務はない。義務は愛を排除する。そして愛を排除したすべては邪悪で卑しい。私には両親はない。私は私の家族を否認する。彼らの愛を私は必要としない（29：43）。

以上のようにミハイルは父の意見に耳を貸そうともしなかった。対立は理念に基づく理想と、実生活に生きるということに基づく現実の対比として浮かび上がっている。

もっとも、ここでカーは断罪に赴かない。だからこそ、金銭的地位の問題は単なる経済の失策ではなく、「理念と現実の乖離」の最も際立った具体像として描かれている。自由を唱えつつ他者の自由を侵害することの逆説が、貸借・未払い・関係の磨耗という手触りのある事実として現れる。ミハイルの自由に対する解釈はこのように可謬的であり、ここに彼の理性の可謬的性質が描写されている。

第一節の家内闘争が権威の問題として現れたのに対し、第二節は資源の次元で同型の構造を露出させる。両者を貫くのは、理性の可謬性、すなわち理念が現実を絶対化の尺度で裁断するかぎり、誤謬は再生産される、という冷厳なメカニズムである。

以上より、第一章の結論は明快である。ミハイルの「自由」は、父権の拒絶と金銭的な問題による地位喪失（実際には依存化）の双方において、理念の純粹性を守るために現実の複雑さを切り捨てる傾向を示した。だがこの現実の切断は、他者の自由・生活・信頼という「現実の糧」によってのみ成立する。ミハイルの「自由」における可謬性とは、理念が現実の倫理に対して盲目になるときに出現する逆説であり、以後の「平等」「友愛」の章で、民族観・組織観・友情観という異なる場面においても、同じ構造が反復されていることを次章より明らかにしていく。

以上、バクーニンと彼の「自由」について考察した。

次には、バクーニンと「平等」における彼の理性の可謬性を考察していく。

II. 平等

II. 1 スラヴ民族の優位性——民族主義と民主主義のねじれ

1848年の二月革命は、バクーニンにとって「生涯中最も幸福な時」であったし、彼にとって革命は「彼の要素」であった（149：207）。バクーニンの労働者に対する視線も一挙に理想化され「わが誇り高き労働者」となり、パリの衛兵宿舎に寝起きし

「素朴な教育のない人々」の高潔さを讃える高揚は、そのまま「平等」の夢を大陸全体へ拡張する衝動へと接続する（149：207-208）。

しかし、パリの恍惚から遠く離れ、彼が平等の政治的設計を本格化させたのはプラハである。同年6月3日にバクーニンはプラハへ急行した。開催中であったスラヴ会議は、チェコ・スロヴァキア・南スラヴを中心とする「民族的平等」の場であると同時に、オーストリア帝国の旧来秩序とドイツ・ハンガリーの台頭に直面する政治的現実の膨大な摩擦の場でもあった（156-157：217-218）。

ここで即座に露呈したのは、同時代の「民主主義」と「民族主義」が容易に連帯しえないという構造的矛盾である。ウィーンの独逸系民主派は汎ドイツ主義を掲げ、ボヘミアをドイツ圏にとどめようとする。他方、ハンガリーの自由派は自らの解放を唱えつつ、スロヴァキアやクロアチアの民族的要求に応じない（157-158：218）。こうしてチェコとドイツ、ハンガリーとスラヴの対立が対置されると、スラヴ側は帝国に対して「改革されたオーストリア帝国」を自認するという逆説的連合に傾き、民族的平等はしばしば反動との結託に変質した（158：218）。この状況は、革命の担い手としての「平等」の理念が、国民国家形成の力学に接続されるや否や、容易に他者排除の論理へ反転する可謬性を示している。

バクーニンはこのねじれを、理念の側から解こうとした。彼は会議で北部委員会の書記を務め、スラヴ諸民族を単一の汎スラヴ理念に「融合」し、それを民主化する二重課題を掲げる（158-159：220）。そこで現れた感情を団結させたものは、ドイツへの敵意である。彼は、「エルベからウラル、アドリアからバルカンに至るまで万人が理解する合言葉」として“Zahrabte niemce!（ドイツ人を打倒せよ）”を示し、反独が兄弟愛の証しと化す場面をカーは描写している（159：220）。

しかし、この反感が共同性を束ねるほどに、普遍的な平等（諸民族の相互承認）は逆に疎外される。すなわち、敵の設定によって内部の「平等」を強化する戦略は、外部の不平等を前提にしなければ作動しえない——ここに理念の自己矛盾がある。しかしバクーニンはその矛盾に気づいていないばかりか、以下のように綴っていることをカーは引用を以て強調している。

『新スラヴ政策の基礎』のなかで彼はスラヴ人は長く抑圧の犠牲であったから決して他に対する抑圧者にならぬであろう、といじらしいほどの人の心理を無視して説明した（159：220-221）。

すなわち、この引用箇所は、スラヴ人は長らく被害者であったのだから、加害者となることは決してないと主張したのに対するカーのイギリス人らしい皮肉の混ざった一文となっている。このようにバクーニンは人間性に対しても、理念が先行して現実

的診断を不得手としていることをカーは皮肉を以て、しかし、糾弾せず指摘している。

構想の制度化において、彼は三つの文書を起草した。すなわち、『新スラヴ政策の基礎』『スラヴ連邦の基礎』『スラヴ人民の国内制度』である。ここで掲げられたのは、フランス革命の三原則「自由・平等・友愛」を土台に、スラヴ連邦の最高機関たる「スラヴ評議会」を置き、貴族制や特権、農奴制を否定する普遍主義的秩序を構想する青写真であった（160：221）。しかし、これらの文書は会議では採択されず、最終的に満場一致で可決されたのは、パラツキーの手による穏健な「ヨーロッパ人民への宣言」とどまった（160：221）。すなわち、スラヴの解放をうたう理念は、現実政治の場では「無害化」され、民族間の利害と帝国維持の論理の前に退いたのである。

この挫折は、パリの熱狂からプラハの分裂へと至る、理念の変質過程を鮮明に示す。カウシディエールが放った「革命の第一日には至宝、第二日には銃殺もの」という皮肉は、破壊局面における彼の卓越と、構築局面での設計の空洞化を端的に言い当てている（150：208）。破壊の速度で理念を普遍化しようとするがゆえに、制度化の局面では調整可能性を欠き、結果として、反独の念に触発された「優位性」の物語に回収されるのである。

さらに、1848 年末にケーテンで執筆されたミハイル・バクーニンの著作『スラヴ人への手紙』は、社会革命のパッセージをベルリンの穏健派に削除されつつも、オーストリア帝国の解体とスラヴ諸共和国の連邦化を鮮明に掲げた（169-170：236-237）。

ここで「平等」は、もはや抽象的理念ではなく、帝国秩序の再編として具体化される。その急進性は、翌年エンゲルスが『民主的汎スラヴ主義』で辛辣に批判する通り、地理・人口・都市の独語化といった現実条件の前では空想的に見えた（176：243）³。

総じて、バクーニンの「平等」は、二つの顔をもつ。一つは、諸個人の平等を民族の平等に拡張し、帝国の解体へと踏み込む普遍主義であり、もう一つは、反独という敵意の共有を媒介に内部凝集を得る、選別的な共同性である。前者は制度化において挫折し（160：221）、後者は短期的な動員効果をもたらすが、普遍性を損なう（159：221）。カーは、この両義性を通して、理念が現実の差異に鈍感なとき、平等は容易に優位性の物語へと墮すること、そしてそれ自体が「理性の可謬性」の一形態であることを示している。

以上、バクーニンの理性の可謬性をスラヴ民族の優位性の強調の中に見た。

以下では、彼の「平等」と秘密結社について考察することにより、カーの可謬性のテーマについて考察する。

³ しかし同時に、これは 1918 年の帝国崩壊を 70 年先取りする先駆的構想でもあった（175：244）。

Ⅱ. 2 秘密結社における自身の独裁的地位の採択——理想の組織化と権威の可謬性

プラハ会議における理念の挫折（前節参照）の後、バクーニンはその普遍的構想を維持しつつも、より閉鎖的な組織へとその実践の場を移した。彼の思想は、革命の「公共圏」から「秘密圏」へと沈潜し、理念の制度化は結社という非公開の秩序を媒介に遂行されることになる。ここで現れるのが、いわゆる「秘密結社」における彼の独裁的地位である。

カーによれば、バクーニンは1848年以降の亡命生活のなかで、次々と即席の秘密結社を結成し、同時にそれを自らの個人的権威によって統率した。プラハ会議が失敗に終わった直後、彼は「スロヴァキア人やポーランド人の若者を糾合して一種の陰謀的同盟を作ろうとした」が、それは持続性を欠き、まもなく瓦解したと記されている（161：222）。理念を共有する小集団を生み出すたびに、彼はその頂点に立ち、「組織」よりも「意志」の統一を優先した。この「即成の結社」こそ、ミハイル・バクーニンの平等のもう一つの顔、すなわち理念の権威化を示すものであった。

カーがミハイルをこのように表現している箇所がある。

彼は破壊すべきものがひとつでもある以上、破壊を主張した。彼は反逆すべきものがなにひとつない時でさえ——反逆を主張した。彼は新秩序を樹立する建設的な仕事に興味を持たなかった（150：208）。

これは破壊的瞬间における彼の天才性と、構築的段階での自己過信を指すものである。理念の爆発力をもって体制を瓦解させる力は卓越していたが、その後に続く組織運営の段階では、彼自身の意志が制度を凌駕してしまうことを明白にした一文である。結果、理想の「平等」は、個人の支配という形で実現されてしまうのである。

バクーニンはまた、逮捕と追放の危険を回避するためにしばしば偽名や二重旅券を用いた。ベルリン、ブレスラウを転々とし、国家権力を欺くその行動は、自由を守るための抵抗でもあったが、同時に「隠匿」と「策略」を常態化させることにもつながった。彼の周囲の結社は、理念共同体であると同時に、情報操作・諜報・資金調達のネットワークであり、その内部では透明性よりも忠誠が価値とされた。理念を共有する平等な仲間ではなく、命令と服従によって維持される小集団に、彼の「平等」思想が自己矛盾へと転化する構図が見える。

この矛盾の本質は、理念の速度が現実の制度設計を上回る点にある。プラハ会議で掲げた三文書（『新スラヴ政策の基』）ほか）を失った後も、彼は構想を捨てず、ただその場を公共空間から秘密空間へと移した。理念の普遍性を守るためにこそ、彼は

その普遍性を直視せず、制度的議論よりも直感的信頼に基づくネットワークへと依存したのである。これが、のちの「国際同盟」「社会主義同盟」などに連なる原型であり、同時に、自由を掲げながら自由を抑圧する構造を早くも内包していた。

カーはこの時期のバクーニンを、「破壊の天才であると同時に、構築の無能者」と呼ぶ（150：208）。だがこの言葉を単なる性格批判として読むべきではない。むしろそれは、理念が現実を設計する段階において必然的に孕む可謬性の露呈である。理念の純度を守ろうとすればするほど、現実の多様性や相対性を包摂できなくなり、結果として、平等を掲げた組織は、平等を侵犯する。

この過程を、カーは冷徹に「理念の権威化」として描く。理性は理念の多様性を受け入れる回路を閉ざし、単一の理念に奉仕する方向へと修練していくことを主張している。この視点は、『危機の二十年』にも登場する。カーは『危機の二十年』において、以下のように述べている。

ユートピアンは目的と事実の相互依存を認めるとはいえ、あたかも目的をそれが唯一適切な事実であるかのように扱って、しかも常に希望的命題を直接法で表現する（Carr 1939, 17：カー 2011（邦訳）、42 頁）。

すなわち、ユートピアンは、目的と事実のあいだにある相互関係を知りながらも、目的を事実の名を借りて絶対化し、希望を確信の文法で語ると、カーはいうのである。

すなわち、理性が理念の多様性を排除するという『バクーニン』における結社の描写は、すでに『危機の二十年』のユートピアニズムとリアリズムの視座の萌芽を含んでいる。バクーニンの秘密結社とは、理念を自己防衛するために独裁化する実験室であり、その過程で理念の純度が権力化することを示す歴史的寓話であった。

すなわち、バクーニンの秘密結社における独裁的地位は、単なる権力欲ではなく、理念を純粋に保つための逆説的手段だった。だが、その瞬間、理念はもはや「平等」ではなくなる。平等の理念を保持しようとする行為が、最も不平等な形態すなわち、一人の絶対的意志による支配である独裁を生み出す。この自己崩壊の構造こそ、カーが『バクーニン』で描いた人間理性の限界であり、可謬性であり、同時に『危機の二十年』におけるリアリズムの倫理的根拠となるのである。

以上、秘密結社におけるバクーニンの独裁的地位の採択について可謬性という観点から考察した。

次章では、バクーニンと「友愛」について検討する。

Ⅲ. 友愛

Ⅲ. 1 友情の破綻——ロシア人の友と「可謬性」

バクーニンにとって「友愛」は、理念の共同性（同じ言葉を語り、同じ敵を指差すこと）の名で、人間関係の現実的維持（金銭・信用・安全の分有）をしばしば後景化させる装置でもあった。本章では、その装置がどのように作動し、やがて「友情の破綻」を招いたのかを、まずロシア系の友人関係に焦点を当てて検討する。

1848 年二月革命下のパリで、バクーニンは恍惚とした「普遍的な友愛」の空気に浸り、労働者を高潔な人々と讃えつつ（149：208）、衛兵宿舎に同宿して日夜、集会・デモ・行進に身を投じた（149：208）。

しかし同時に、もっとも古い同国人の友人たちはバクーニンと距離を取り始める。パリに残っていたロシア人作家のツルゲーネフとアンネンコフは、革命関与の嫌疑を恐れて「彼のもとを訪れず、街で一度見かけただけ」と報告しており（150：208）、これまでの文化サロン型の交誼は、政治、すなわち警察的リスクの前で急速に脆弱化した。つまり、友愛は理念で結ばれるほど、連座や監視という共振の代償を他者に強いる。ここにすでに、他者の自由を侵す「理念の圧」という友愛の逆説がみられる。

さらに、バクーニンの側では、友愛を「精神的共鳴」とみなし、金銭・信用の次元を軽視しがちな態度が、友情を掘り崩す別の回路を生む。彼の資金繰りは革命資金の抛出と同時に慢性赤字を伴い、6月～9月の大陸遊動の末、宿賃滞納で持ち物を差し押さえられるまでに逼迫した。友愛は理想的には相互扶助だが、現実には依存の片務化として表れ、関係の磨耗を加速させる。

さらに致命的だったのは「スパイ疑惑」の流布である。1848 年 7 月 6 日、『新ライン新聞』がパリ通信の形で「パリから追放されたロシア人ミハイル・バクーニンはロシアの手先」と報じた。のちに本人の反論とジョルジュ・サンドの否定が掲載され収束し、名誉は形式的には回復されたものの、疑惑の影は彼のネットワークに長く残滓を残した（163-164：224-225）。

疑惑は、理念の共同体の外縁である旧友・同胞に対して、より強く作用した。革命の「熱」は、社会的信用のインフラ（出版・サロン・資金供給）の冷却を招き、ロシア人の友人たちは沈黙という距離の取り方で自己保全を図った。こうして、友愛は理念の最前線で高まるほど、背後で信頼の流出を招いた。

換言すると、友愛はバクーニンにとって、理念の共同性ゆえに、他者の自由と安全を犠牲にしてしまう結果となった。これが、バクーニンにおける「友愛の可謬性」であり、第一章「自由」、第二章「平等」で確認した理念／現実の乖離の、対人的関係における具体的な現れである（149-150, 163-164：208, 224-225）。

以上、ロシア人の交友関係について、彼の友愛という理念から生じる可謬について論じた。

以下では、理念の共同性の内側でさえ生じた対立を通じて、ここまでの考察を深化

させる。

Ⅲ. 2 対マルクス／エンゲルス——同志から論敵へ

本節では、バクーニンとマルクス、エンゲルスの関係が、いかにして同志的接近から戦略的摩擦を経て理論的断絶へと移行したかを、1848 年を軸に跡づける。

出発点は、同時代のブルジョワ民主主義への幻滅を共有する地点にあった。六月蜂起後のパリやフランクフルトの議会主義を前に、バクーニンは「憲法・議会」への不信を強め、社会秩序の全的転覆を志向する（169-173：236-239）。この転回は、プロレタリア革命を掲げる『新ライン新聞』の論調と同調的で、1848 年 9 月にはベルリンでマルクスと友好的に会っている（164：238）。つまり、この時点では、対資本・反議会という否定の方向において両者は接線を持った。

しかし、早くも同年夏、戦略的摩擦の「種」は蒔かれる。パリでマルクスがヘルヴェクの「ドイツ軍団」遠征を嘲笑したことに、バクーニンは「狭量」と不快を表明した（150：208-209）。蜂起の即時性を重んじるバクーニンと、組織と分析の優先を重んじるマルクスの間に、時間感覚のずれが生じる。続いて、同年 7 月 6 日、先述のように、マルクスの『新ライン新聞』スパイ記事（のち否定）掲載は、形式的には収束したとはいえ、相互不信の限界値を下げた（163-164：224-225）。バクーニンは怒りを示しつつも公的には応酬を抑え、私的接触は続いた（164：225-226）。この段階の破綻は保留されている。

決定的なのは、1848 年末にコーテンで執筆され、翌年エンゲルスが『民主主義的汎スラヴ主義』で徹底批判した『スラヴへの手紙』である。ここでバクーニンは、オーストリア帝国の解体とスラヴ共和国連邦を明確に提唱する（169-171：241-242）。これに対しエンゲルスは、地理・人口分布・都市の言語状況を根拠に「中欧スラヴの将来性」を切り捨て、さらに「スラヴは反動的」という一般化で構想の政治的位相を逆照射する（176：243）。

両者の溝は、革命の単位をどこに置くかで決定的になる。すなわち、バクーニンが民族の自決と社会革命の同時達成を構想したのに対し、マルクスとエンゲルスは、階級とその物的基盤の変革を優先し、民族主義を反動と見做した（176：243）。ここに、国民的ロマン主義と唯物史観の不可逆的な結節点が現れる。

以後、両者の語りは互いに神話化もしくは悪魔化のレトリックを帯びる。バクーニンは晩年、「自分は秘密結社の長で、一言で人を殺すこともできる」と豪語したと回想するが、これをカーは自己演出的虚構として退けている（164：226）。他方、エンゲルスは汎スラヴ構想の全体を「歴史的前提を欠く幻想」と断じ、革命の地図から民族の層位を剥ぎ取る（176：243）。こうして、同じ 1848 年を起点に、現状の共同体

「否定」として出会った三人は、「肯定」の設計（何を、どの単位で、どう建てるか）で相互排除へと向かった。

以上より、「友愛」は、同志的近接を媒介すると同時に、設計原理すなわち、階級か民族か、が異なるとき、排除の論理へと反転する。バクーニンの側は、民族解放の正当性を掲げるあまり、現実の異言語・異都市条件を観念の速度で裁断し、結果として普遍的連帯や国際主義を損なう点にあった。

他方、マルクスとエンゲルスの側は、国民的抑圧とその感情の厚みを「前提欠如」として切り捨てやすい冷酷さに潜む。友愛は、設計原理の差異を橋渡しする制度を欠くとき、最初に破綻した。この破綻がのちの第一インターナショナル内の対立・離反へと受け継がれていくことはよく知られているが、その原像は、以上のようにすでに1848年に鮮やかであった。ここにおいても、バクーニンの考える理想的な友愛は理念の共同性を、つまり同じ言葉を語り、同じ敵を指差すことを基盤においたがために、多くの可謬性を孕んだ。

以上、本章においては、バクーニンと彼の友愛について、彼の定義する友愛があまりに理念的過ぎるがゆえに起こった摩擦を通して、理性に基づいた友愛の可謬性について検討した。

次章では、ここまでの議論を総括し、バクーニンの理性の可謬的性質について検討する。

第三部 総括——理性の可謬性と理念の転生

IV. 『バクーニン』における「人間の理性の可謬的性質」

ここまで考察してきたように、E・H・カーが『バクーニン』で描こうとしたのは、単なる十九世紀革命家の波乱の生涯ではない。彼が真正面から見つめたのは、「理念の化身」として生きた人間の理性そのものであった。カーにとって、ミハイル・バクーニンという人物は、理念の光と影、理性の創造性と破壊性、その両義的構造を最も典型的に体现する存在であったと考えられる。『バクーニン』においてカーは、人間理性を、真理や秩序を確立する安定した原理としてではなく、誤謬を通してしか成熟しえない動的な力として描いている。すなわち、カーは理性が正確な判断を導く道具ではなく、可謬的な生成過程そのものなのであるという視点を獲得していることがこれまでの考察で明らかとなった。

カーは『バクーニン』全編を通じて、主人公の生涯を「思想と行動の断絶」によって特徴づけている。理性の構築した理念はつねに現実から乖離していた。これらについては先述した通りである。

カーはこの内的緊張を、単なる個性の矛盾としてではなく、人間理性そのものの構造的限界として捉える。理性は自己を信じすぎるがゆえに、つねに独断へと傾く。そのため、理性に基づく理念の追求はしばしば非理性的行為として帰結する。バクーニンが「自由のために独裁を擁護し」、「平等のために服従を要求し」、そして「友愛のために友情を損なった」とき、そこに表れていたのは理性の裏面である。

カーはこの理性の限界を、十九世紀ヨーロッパ思想における典型的な現象として読み取る。理性への信仰が啓蒙主義からヘーゲル主義へと継承される過程で、人間は自らの理性を絶対化し、歴史や他者をその尺度によって裁断するようになった。バクーニンもまた、自由・平等・友愛という理念を理性の名のもとに絶対化し、他者の現実をその理想に従属させようとしたことはすでに見てきた。

しかし、その理性は必ずしも普遍的ではなく、むしろ情熱と本能に駆動された非理性的な感情であった。すなわち、カーは、理性が自己の限界を自覚しないとき、それは非理性と区別できなくなるという洞察を提示していると考えられる。

以上を総括すると『バクーニン』全体に通底する主題は、理念の崇高さとその破滅的帰結の同時性である。理念は人間を動かす力であると同時に、人間を破壊する力でもあるというのが『バクーニン』におけるカーの主張の核となるといえよう。カーはこの二面性を「理想の誤謬」として描いている。先にふれたように、バクーニンが自由のために権威を否定しながら、秘密結社において自らが権威となることを夢想するに至ったこと、あるいは自由の名のもとに他者の自由を抑圧したことなどは、理性が生み出す必然的な悲劇だった。理性は理想を構築し、それを現実に応用しようとするが、その瞬間に現実の多様性を破壊してしまう。カーはこうした構造を「理念と現実の乖離」ではなく、「理性の可謬性の必然的発露」として捉える。

この理性の可謬性という観点は、のちの『危機の二十年』におけるリアリズムの倫理的基盤とも直結している。『危機の二十年』第2章においてカーは、「理性は多様性や相対性を受け入れる回路を閉ざし、単一の理念に奉仕する方向へと修練していく」と述べている（17：42）。

本論で明らかにしたように、この構造の中心には、カーが一貫して描き続けた「人間の可謬性」への肯定的な倫理的洞察がある。人間は理念を通して世界を理解しようとするが、理念そのものが人間の限界から逃れ得ない。ゆえに、理念の失敗は人間の失敗であると同時に、人間の成長の条件でもある。バクーニンの生涯は、理念が誤謬を経て刷新されていく過程、すなわち理性の試練による精神の生成史として読まれるべきであるではないか。カーは彼を断罪することなく、その誤謬の中に倫理的価値を見出している。理念の破滅は、理念が現実と出会う場所であり、そこにこそ理性の進化があることをカーは示唆している。

この意味で、『バクーニン』はカーの後期思想を予告する作品である。のちの『歴

史とは何か』で示される「歴史の理性」、すなわち、誤謬を通して真理に近づく可謬的理性の思想は、すでに本書の中で実験的に表現されている。バクーニンはその生涯をもって、理念と理性の限界を証した存在であった。彼の生き方そのものが、カーにとっては、人間が理想をもって現実を変えようとする限り、避けることのできない矛盾の象徴だったといえる。

カーは、理性の誤謬を恐れるのではなく、それを通じて理念が更新される過程を肯定した。誤謬を経てこそ理性は謙虚となり、理念は現実根ざす。『バクーニン』は、まさにこの誤謬を通じた理性の成熟を描いた書物であり、そこにカーの倫理的リアリズムの萌芽が息づいているのであると考えられる。

以上、『バクーニン』の総括を行った。

次章では、1930年代におけるカーの思想形成過程と可謬性というテーマについて考察する。

V. E・H・カーにおける「人間の可謬性」の肯定—1930年代伝記群を貫く思想的統一性

E・H・カーの1930年代の伝記的著作群、すなわち『ドストエフスキー』、『浪漫的亡命者たち』、『カール・マルクス』、そして『バクーニン』は、いずれも単なる人物伝の枠を超え、人間の理性や理念が現実の中でいかに破綻し、修正され、刷新されていくかを描いた思想史的試みである。これら四作品を通じて一貫して見出されるのは、カーが人間の可謬性(fallibility)を否定するのではなく、むしろそれを人間存在の肯定的契機として擁護していたという点である。

カーは伝記作品執筆期以前、19世紀的自由主義の信奉者として、理性の力によって社会を改善できるという啓蒙主義的信念を共有していた(ハスラム 2007, 24頁)。しかし、伝記作品執筆の契機となった外交官としてリガに赴任した経験、第一次大戦後の理想主義外交の崩壊、さらにはロシア革命後の世界の混乱を目の当たりにするなかで、彼は「理性への過信」こそ、人間の誤謬を生む根本原因であると考えようになった。なかでも、ラトヴィア駐在時代にロシア文化と知識人たちに触れた経験は、理性を普遍的・絶対的原理とみなす西欧的発想への懐疑を生じさせた(河村 2022a、河村 2022b、河村 2023a、河村 2023b)。

それ以降、カーの著作群には、理性を相対化し、人間が生まれ育った文化圏・時代・環境の制約から逃れられないという認識が貫かれることになる。

著作『バクーニン』については、前節で総括したところである。その他の三つの伝記作品における、カーが示唆した人間の理性の可謬的性質を振り返ることにより、カーの1930年代の知的な思想形成期における「可謬性」の意味を採取的に総括したい。

そのために、以下では拙論三論文を、ごくごく簡単に概観することとする。

1. 『ドストエフスキー』——理性の限界と情念の認知

カーの伝記的試みは『ドストエフスキー』に始まる。ここで彼は、理性による道徳的体系化を拒み、人間の内部にある矛盾や情念を通じて真理を探究したドストエフスキー像を描いた。ドストエフスキーの登場人物たちは、理性的に正しい選択を行おうとしながらも、常に衝動・信仰・愛憎に突き動かされる。カーにとってその姿は、理性が単なる論理ではなく、誤謬と葛藤を通して深化する生の過程そのものであった。彼は、人間の理性が「正しさ」を保証するのではなく、「誤りうること」を通してのみ成熟すると理解している。この視点は後の全作品を貫く出発点である（河村 2024a）。

2. 『浪漫的亡命者たち』——理想の破綻と文化的相対性

次作『浪漫的亡命者たち』では、カーはロシア知識人たちの理想主義的情熱を描くと同時に、理想が現実と乖離していく構造を分析した。とりわけ、ナタリヤ・ゲルツェンの「愛の宗教」に象徴される浪漫主義は、感情と自由を絶対化した結果、現実社会との多大なる乖離を露呈するに至った。カーはここで、理性も理念も文化や時代に規定される相対的産物であることを強調する。

人間は自らの生まれ育った文化的文脈から完全に離脱することはできず、そこから発する理性は常に偏りと限界を伴う。したがって、誤謬は人間に内在する必然的構造であり、それを否定するのではなく自覚することこそが成熟の契機であるとカーは説く（河村 2024b）。

この「文化的制約の自覚」は、カーがイギリス的合理主義から脱却し、ロシア的情念・共同体意識への理解を深めていった過程を明白にしている。彼は、啓蒙主義的普遍理性に依拠したユートピア主義を批判しつつも、同時に人間の理性の可変性を認め、新たな理想を構築する余地を残す。すなわち、理想とは誤謬を経て修正されるべき仮設的構築物であり、「理性の可謬的性質」を肯定的に捉えるリアリズムの原型がこの伝記作品執筆期に形成されたことの証左となる。

3. 『カール・マルクス』——理論と人間の未完性

1934 年の『カール・マルクス』では、カーの可謬性理解が最も明確に表現される。彼はマルクスを、完成された理論の創始者としてではなく、「誤謬と修正を繰り返す

人間的思索者」として描く。

マルクスの経済理論や革命思想の中に見られる非一貫性や矛盾を、カーは断罪することなく、むしろ「思想が歴史的文脈に制約されることの証」として肯定する。

たとえば、初期の人間疎外論と後期の経済学批判との断絶は、思想の誤りではなく、時代の変化と自己修正の結果である。カーにとって、思想とは静態的な体系ではなく、現実との相互作用のなかで生成する動的過程である。マルクスが経済学と哲学の間で揺れ動き続けたこと、また理論と実践の矛盾に苦しみながらも思索を続けたことは、理性が可謬であるからこそ創造的でありうるという人間観の表現に他ならない。

さらにカーは、思想家の個人的背景や文化的環境が理論形成に及ぼす影響を強調する。マルクスの思想は、19 世紀ドイツの哲学的伝統、フランス革命後の社会思想、そしてイギリスの産業資本主義という三つの文化的文脈に交差しており、それぞれが彼の理論を限定している（河村 2025b）。人間はその生まれ育った文化圏の思考様式から完全には自由になれない。この認識は、カーが可謬性を「人間的条件」として肯定する根拠である。

4. 1930 年代に一貫した可謬性の倫理——誤謬を通じた成長の思想

『バクーニン』を含めた四つの伝記を貫いて、カーは「誤謬」を否定的なものとしてではなく、倫理的な自覚と成長の契機として位置づけた。理性は誤りうるからこそ、他者との対話や現実の多様性を受け入れることができる。理性の過信は独断と暴力を生むが、誤謬の自覚は寛容と刷新を可能にする。

この肯定的可謬性の思想は、後の『危機の二十年』における「リアリズム」概念に継承される。そこでは、「理性は多様性や相対性を受け入れる回路を閉ざすとき、単一の理念に奉仕する危険を孕む」ことが述べられている（Carr 1939, ch.2）。この警告は、1930 年代の伝記群で描かれた登場人物たち、例えば、理想を絶対化したナタリヤ、理念に殉じたマルクスやバクーニン、情熱に溺れたドストエフスキーの姿にすでに表れていた。

カーは、理性が可謬的性質を持つという事実を悲観的にではなく、人間が誤りを通じて真理に近づく可能性の証として見ていた。人間は文化的・歴史的制約を免れないが、その制約を自覚することこそが自由への第一歩である。可謬性とは、理性の敗北ではなく、人間的創造の条件なのだ。

以上、本章では伝記著作『バクーニン』を検討したうえで、他の伝記作品とカーが考察した人間の理性の可謬的性質という問題について総括した。カーにおける可謬性とは、文化と時代の制約を内包しつつも、自己反省と理念の更新を可能にする人間精神の根源的条件なのであると考えられる。

結語・今後の課題

本稿で明らかにしたのは、E・H・カーが『バクーニン』において、人間の理性の可謬的性質、すなわち、人間が理念と現実の乖離のなかで誤謬を重ねながら生成していく存在であるという視点を明確に提示していたという点である。バクーニンは、理念の純粹性を信じて自由を追い求めたが、その理性はしばしば情熱に突き動かされ、他者への支配や金銭的依存といった非合理へと転化した。カーはその生涯を単なる逸脱や失敗としてではなく、人間の理性が持つ可謬的性質の証として描いた。理性は理念を構築するが、それが現実と出会うとき、必ず摩擦と逸脱を生じる。カーはこの摩擦をこそ、人間が現実を理解し、理念を刷新していく原動力として肯定している。

この「可謬性の肯定」は、『バクーニン』にとどまらず、1930年代のカーのすべての伝記作品に通底することも、第三部にて明らかにした。これらの作品を貫くのは、人間の誤謬は克服すべき欠陥ではなく、文化的・歴史的条件の中で生成する人間の本来の在り方であるという思想である。カーは、理性の限界を認めることによってこそ、他者や歴史への理解が可能になると考えた。

したがって、1930年代の伝記群は、カーがのちに『危機の二十年』や『歴史とは何か』で展開するリアリズム的倫理の基礎を形成している。彼にとって、人間は自らの文化圏・時代・信念の束縛から完全に自由ではなく、その制約の中で誤謬を犯し、修正しながら生成していく存在である。この「誤謬を通じた生成」の認識こそが、のちに彼が説く「人類の進歩」の思想へと連続していく。

今後の課題は、現段階の研究過程で二つ挙げられる。第一に、伝記作品群において一連の拙論が発見した、カーの可謬性に対する肯定的視点が、カーがのちに表した理論書、すなわち『危機の二十年』や『歴史とは何か』、または『ロシア革命—レーニンからスターリンへ』（1979）といった著作のなかで、どのように転生しているのかを研究することが挙げられる。

第二に、この伝記作品群における可謬性の描写が、どのようにして、カーの進歩史観へと転化していったのかを検証することも、もう一つの大きな課題として挙げられる。

伝記作品執筆期にカーが発見し確立した思想の柱の輪郭が少しずつ明らかになってきている現段階において、以上の二つの研究課題は、これまで顧みられることの少なかったカーの伝記である文学の領域の研究意義を大きく打ち出すことになるだろう。

参考文献

一次文献

- Carr, E.H. (1931) *Dostoevsky (1821-1881): A New Biography*, London, Allen & Unwin (松村達雄訳『ドストエフスキー』筑摩書房、1968年)。
- (1933) *The Romantic Exiles : A Nineteenth-Century Portrait Gallery*, Victor Gallancz (酒井只男訳『浪漫的亡命者たち』筑摩書房、1953年)。
- (1934) *Karl Marx: A Study in Fanaticism*, London, J. M. Dent & Sons (石上良平訳『カール・マルクス』未来社、1956年)。
- (1937) *Michael Bakunin*, London, Macmillan (大沢正道訳『バクーニン 上・下』現代思潮社、2013年)。
- (1939) *The Twenty Years' Crisis, 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations*, London, Macmillan (原彬久訳『危機の二十年』岩波文庫、2011年)。
- (1961) *What Is History?*, Macmillan (近藤和彦訳『歴史とは何か』岩波書店、2022年)
- (1979) *The Russian Revolution : from Lenin to Stalin(1917-1929)*, Macmillan (塩川伸明訳『ロシア革命——レーニンからスターリンへ、1917-1929』岩波現代文庫、2000年)。
- (2000) “An Autobiography”, in Michael Cox (ed.), *E. H. Carr: A Critical Appraisal*, London, Palgrave, pp. xiii-xxii (中嶋毅訳「自伝的覚書」『思想』944、2002年)。

二次文献

- Booth, Ken. (1991) “Security in Anarchy: Utopian Realism in Theory and Practice,” *International Affairs* 67 (July), pp.527-545.
- Bull, H. (1969) “The Twenty Years' Crisis Thirty Years On”, *International Journal* 24 (Autumn), pp.628.
- Cox, M. ed. (2000) *E. H. Carr: A Critical Appraisal*, Basingstoke and New York, Palgrave, 2000.
- Cox, M. (2010) “E. H. Carr and the Crisis of Twentieth- Century Liberalism: Reflections and Lessons,” *Millennium: Journal of International Studies* 38 (May) pp.523-533.
- Fox, W. T. R. (1985) “E. H. Carr and Political Realism: Vision and Revision,” *Review*

- of International Studies* 11(January), pp.1-16.
- Fiott, D. (2010) "Carr's Quest: Escaping the 'Rules' of International Relations?" *ECPR Graduate Conference*, Dublin, Summer 2010.
- Haslam, J. (1999) *The Vices of Integrity: E. H. Carr, 1892-1982*, Verso.
- Howe, P. (1994) "The Utopian Realism of E. H. Carr," *Review of International Studies* 20 (July), pp.277-297. Johnston, W. 1967. "E. H. Carr's Theory of International Relations: A critique," *Journal of Politics* 29 (November), pp.861-884.
- Jones, C. (1998) *E. H. Carr and International Relations: A Duty to Lie*, Cambridge University Press.
- Lauer, M. (2005) "From a Bookshop in Riga: Edward Hallett Carr's Debt to Fyodor Dostoevsky," A thesis submitted to the Faculty of Graduate Studies and Research in partial fulfilment of the requirements for the degree of Master of Arts, Institute of political Economy, Carleton University, Ottawa, Ontario.
- Molloy, S. (2003) "Dialectics and Transformation: Exploring the international Theory Of E. H. Carr," *International Journal of Politics, Culture and Society* 17 (Winter), pp.279-306.
- Molloy, S. (2006) *The Hidden History of Realism: A Genealogy of politics*, Palgrave.
- Morgan, R. (1974) "E. H. Carr and the Study of International Relations," in Chimen Abramsky and Beryl J. Williams (eds.), *Essays in Honour of E. H. Carr*, London, Macmillan, pp.171-180.
- Morgenthau, H. (1948) "The Political Science of E. H. Carr," *World Politics*, 1(1), pp.127-134.
- Nishimura, K. (2011) "E.H.Carr, Dostoevsky, and the Problem of Irrationality in Modern Europe," *International Relations* 25 (March), pp.45-64.
- Rich, P. (2000) "E. H. Carr and the Quest for Moral Revolution in International Relations," in Michael Cox (ed.), *E. H. Carr, A Critical Appraisal*, Palgrave, pp.198-216.
- Wilson, P. (2000) 'Carr and his Early Critics: Responses to The Twenty Years' Crisis' in Cox ed., *E. H. Carr: A Critical, Appraisal*, Basingstoke and New York, Palgrave, pp.165-197.
- Wilson, P. (2001) "Radicalism for a Conservative Purpose: The Peculiar Realism of E.

H. Carr," *Millennium: Journal of International Studies* 30 (January), pp.123-136.

- 遠藤誠治 (2003) 「『危機の二十年』から国際秩序の再建へ—E. H. カーの国際政治理論の再検討 (帝国・戦争・平和)」『思想』第 945 号:47—66 頁。
- 遠藤誠治 (2009) 「『危機の二十年』の現実主義論」『外交フォーラム』第 22 号 2 巻: 22—25 頁。
- 勝田吉太郎 (1979) 『人類の知的遺産 49 : バクーニン』講談社。
- 河村しのぶ (2021a) 「西村邦行著『国際政治学の誕生—E・H・カーと近代の隘路—』に関する一考察」『総合文化学論輯』第 14 号:1—21 頁。
- 河村しのぶ (2021b) 「E・H・カーのリアリズムの起源と『ドストエフスキー』の影響」『総合文化学論輯』第 15 号:1—23 頁。
- 河村しのぶ (2022a) 「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座:『ドストエフスキー』と『危機の二十年』の共通点として」『総合文化学論輯』第 16 号: 85—109 頁。
- 河村しのぶ (2022b) 「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座:『浪漫的亡命者たち』において」『総合文化学論輯』第 17 号: 19—41 頁。
- 河村しのぶ (2023a) 「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座:カー著伝記『カール・マルクス』における『資本論』に関するカーの議論を基に」『総合文化学論輯』第 18 号: 21—41 頁。
- 河村しのぶ (2023b) 「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座:カー著伝記作品『バクーニン』における静的な一元性に対する批判的考察」『総合文化学論輯』第 19 号: 21—40 頁。
- 河村しのぶ (2024a) 「E・H・カーと人間の理性の可謬的性質 (1):カー著伝記『ドストエフスキー』に関する分析」『総合文化学論輯』第 20 号: 37—60 頁。
- 河村しのぶ (2024b) 「E・H・カーと人間の理性の可謬的性質 (2):カー著伝記『浪漫的亡命者たち』に関する分析」『総合文化学論輯』第 21 号: 19—38 頁。

河村しのぶ (2025a) 「E・H・カーの伝記作品群と文化相対主義」『知の悦び——総合文化学の確立へ——』荒木正見編、中川書店。

河村しのぶ (2025b) 「E・H・カーと人間の理性の可謬的性質 (3) : カー著伝記『カール・マルクス』に関する分析」『総合文化学論輯』第 22 号 : 26-49 頁。

北山忍 (2025) 『文化が違えば、心も違う?——文化心理学の冒険』岩波新書。

左近毅 (1973) 「解説」H・M・ピルーモヴァ著『バクーニン伝 下』三一書房 : 213-255 頁。

佐藤史郎、三牧聖子、清水耕介編 (2022) 『E・H・カーを読む』ナカニシヤ出版。

西村邦行 (2010a) 「E. H. カーにおけるヨーロッパ的なものの擁護 1」『法学論叢』第 166 号 5 巻:84-99。

西村邦行 (2010b) 「E. H. カーにおけるヨーロッパ的なものの擁護 2」『法学論叢』第 167 号 3 巻:18-139。

西村邦行 (2010c) 「知識人としての E. H. カー : 初期伝記群と『危機の二十年』の連続性」『国際政治』第 160 号:34-47。

西村邦行 (2012) 『国際政治の誕生—E. H. カーと近代の隘路—』昭和堂。

ハスラム、ジョナサン (2007) 『誠実という悪徳—E. H. カー 1892-1982—』角田史幸、川口良、中島理暁訳、現代新潮社。

ピルーモヴァ、H・M (1973) 『バクーニン伝 上』三一書房。

ピルーモヴァ、H・M (1973) 『バクーニン伝 下』三一書房。

山口育人 (2019) 「<書評>山中仁美・佐々木雄太監訳『戦争と戦争のはざま—E・H・カーと世界大戦—』」『史林』102 (5) : 796-801 頁。

山中仁美 (2003) 「『E・H・カー研究』の現状をめぐって」『国際関係学研究』第 29 号:139-147。

山中仁美 (2014) 「西村邦行著『国際政治学の誕生 : E・H・カーと近代の隘路』」『国際法外交雑誌』第 113 号 3 巻 : 475-479。

山中仁美 (2017) 『戦間期国際政治と E・H・カー』岩波書店。

山中仁美 (2017) 『戦争と戦争のはざままで』ナカニシヤ出版。

[E. H. Carr and the fallible nature of human reason (4)—An analysis of Carr's biography, *Michael Bakunin*].

[KAWAMURA, Shinobu・九州栄養福祉大学/東筑紫短期大学非常勤講師・現在の研究テーマ : E・H・カーの国際政治思想]。